

## 石見の人麻呂と大和の人麻呂

— 一千三百年続いた人麻呂信仰と石見 —

山陰万葉を歩く会会長 川島芙美子

### (一) 『泣血哀慟歌』と『石見相聞歌』の比較からの人麻呂像

- ① 『泣血哀慟歌』から分析する人麻呂の思い 二〇七～二二六（軽の妻）
- ② 『石見相聞歌』から分析する人麻呂の思い 一三一～一三九（依羅乙女と石見）
- ③ 二つの歌の比較から考えられること
- ④ 軽の地の位置
- ⑤ 依羅（恵良）の位置 一四〇・二二三（人麻呂）、二二四・二二五（依羅乙女）
- ⑥ 和爾氏（柿本氏）の背景  
イ 東大寺山古墳の存在  
ロ 『古事記』『日本書紀』の記述より
- ⑦ 人麻呂の生きた時代  
イ 『高市皇子の挽歌』（一九九～二〇二）『軽皇子安騎野に宿す時の歌』（四六～四九）  
ロ 石見国の地名からの推測

### (二) 石見国の位置づけと人麻呂信仰

- ① 『日本書紀』の記述から
- ② 中世の文書から
- ③ 戦国時代の人麻呂信仰  
イ 細川幽齋の温泉津の連歌  
ロ 細川幽齋と関ヶ原
- ④ 江戸時代の人麻呂信仰  
イ 津和野藩主と人麻呂信仰  
ロ 浜田藩主と万葉集

### (三) 人麻呂公忌一千年祭「一七二三年」高津柿本神社への奉納

六代の天皇（靈元天皇 桜町天皇 桃園天皇 後桜町天皇 光格天皇 仁孝天皇）  
による御宸翰御法楽和歌奉納

柿本朝臣人麻呂、妻が死にし後に、泣

血哀慟して作る歌二首 并せて短歌 (巻二)

210 うつせみと 思ひし時にへに云ふ、「うつせみと

思ひし」 取り持ちて 我が二人見し 走り

出の 堤に立てる 槻の木の こちごちの枝

の 春の葉の 繁きがごとく 思へりし 妹

にはあれど 頼めりし 児らにはあれど 世

の中を 背きし得ねば かぎろひの もゆる

荒野に 白たへの 天領巾隠り 鳥じもの

朝立ちいまして 入日なす 隠りにしかば

「我妹子が 形見に置ける」みどり子の 乞ひ

泣くごとに 取り与ふる 物しなれば 男

じもの わき挟み持ち」我妹子と 二人我が

寝し 枕づく つま屋の内に 昼はも うら

さび暮らし 夜はも 息づき明かし 嘆けど

も せむすべ知らに 恋ふれども 逢ふよし

をなみ」大鳥の 羽易の山に 我が恋ふる

妹はいますと 人の言へば 岩根さくみて

なづみ来し 良けくもそなき うつせみと

思ひし妹が 玉かぎる ほのかにだにも 見

えなく思へば

短歌二首

211 去年見てし 秋の月夜は 照らせども 相見

し妹は いや年離る

212 衾道を 引手の山に 妹を置きて 山道を行

けば 生けりともなし

柿本朝臣人麻呂、石見国より妻を別れ

第一 上り来る時の歌二首 并せて短歌 (巻二)

131 石見の海 角の浦廻を 浦なしと 人こそ見

らめ 瀉なしとへに云ふ、「磯なしと」 人こそ

見らめ よしゑやし 浦はなくとも よしゑ

やし 瀉はへに云ふ、「磯はなくとも いさ

なとり 海辺をさして 荒磯の

上に か青く生ふる 玉藻沖つ藻 朝はふる

風こそ寄せめ 夕はふる 波こそ来寄れ 波

のむた か寄りかく寄る 玉藻なす 寄り寝

し妹をへに云ふ、「はしきよし 妹が手本を」 露

霜の 置きてし来れば この道の 八十隈こ

とに 万度 かへり見すれど いや遠に 里

は離りぬ いや高に 山も越え来ぬ 夏草の

思ひしなえて 惚ふらむ 妹が門見む たび

けこの山

反歌二首

132 石見のや 高角山の 木の問より 我が振る

袖を 妹見つらむか

133 笹の葉は み山もさやに さやげども 我は

妹思ふ 別れ来ぬれば

(一) ⑤

柿本朝臣人麻呂が妻依羅娘子、人麻呂

と相別るる歌一首(巻二)

140 な思ひそと 君は言ふとも 逢はむ時 いつ

と知りてか 我が恋ひざらむ

柿本朝臣人麻呂、石見国に在りて死に

臨む時に、自ら傷みて作る歌一首(巻三)

223 鴨山の 岩根しまける 我をかも 知らにと

妹が 待ちつつあるらむ

柿本朝臣人麻呂が死にし時に、妻依羅娘子

子が作る歌二首(巻二)

224 今日今日と 我が待つ君は 石川の 貝にへ

に云ふ、「谷に」交じりて ありといはずやも

225 直に逢はば 逢ひかつましじ 石川に 雲立

ち渡れ 見つつ思はむ

(人麻呂)

710	701	694	672	645
平城京遷都	大宝律令	藤原京遷都	壬申の乱(高市皇子)	大化の改新

(一) ⑦

軽皇子、安騎の野に宿らせる時に、柿

本朝臣人麻呂が作る歌(巻二)

46 安騎の野に 宿る旅人 うちなびき 眠も寝

らめやも 古思ふに

47 ま草刈る 荒野にはあれど もみち葉の 過

ぎにし君の 形見とそ来し

48 東の 野にかぎろひの 立つ見えて かへ

り見すれば 月傾きぬ

49 日並の 皇子の尊の 馬並めて み狩立たし

し 時は来向かふ

(小学館 日本古典文学全集)

### 全国の人麻呂信仰の神社・寺・塚など

「神になった柿本人麻呂」(大養万葉記念館に協力する会発行)より

愛知	静岡	岐阜	長野	山梨	福井	石川	富山	神奈川	東京都	千葉県	埼玉県	群馬	栃木	茨城	山形	宮城	北海道	都道府県	総数	調査済み	
2	2	3	3	1	1	1	3	1	8	4	3	10	16	4	2	1	1	1	0	0	0

宮城	熊本	長崎	福岡	高知	愛媛	徳島	山口	広島	岡山	島根	和歌山	奈良	兵庫	大阪	京都	滋賀	三重	都道府県	総数	調査済み
1	2	1	7	5	8	5	211	10	2	34	3	7	11	4	12	1	6	395	121	0

高市皇子尊の城上の殯宮の時に、柿本

第一 朝臣人麻呂が作る歌一首 并せて短歌(卷二)

かけまくも ゆゆしきかもへに云ふ、「ゆゆしけれども」言はまくも あやに恐き 明日香

の 真神の原に ひさかたの 天つ御門を 恐くも 定めたまひて 神さぶと 岩隠りま

す やすみしし 我が大君の 聞こしめす 背面の国の 真木立つ 不破山越えて 高麗

剣 和射見が原の 行宮に 天降りいまして 天の下 治めたまひへに云ふ、「払ひたまひて」

食す国を 定めたまふと 鶏が鳴く 東の国 の 御軍士を 召したまひて ちはやぶる

人を和せと まつろはぬ 国を治めとへに云ふ、「払へと」皇子ながら 任けたまへば」

大御身に 大刀取り佩かし 大御手に 弓取り持たし 御軍士を 率ひたまひ 整ふる

鼓の音は 雷の 声と聞くまで 吹き鳴せる 小角の音もへに云ふ、「笛の音は」あたまたる

虎か吼ゆると 諸人の おびゆるまでにへに云ふ、「聞き惑ふまで」 ささげたる 旗のまね

きは 冬ごもり 春さり来れば 野ごとに 付きてある火のへに云ふ、「冬ごもり 春野焼く火

の」 風のむた なびかふごとく 取り持てる 弓弦の騒き み雪降る 冬の林にへに云

ふ、「木綿の林」 つむじかも い巻き渡ると

思ふまで 聞きの恐くへに云ふ、「諸人の 見惑

ふまでに」 引き放つ 矢の繁けく 大雪の 乱れて来れへに云ふ、「霰なす そちより来れば」

まつろはず 立ち向かひしも 露霜の 消な ば消ぬべく 行く鳥の 争ふはしにへに云ふ、

「朝霜の 消なば消と言ふに うつせみと 争ふはしに」 渡会の 斎宮ゆ 神風に い吹き惑は

し 天雲を 日の目も見せず 常闇に 覆ひ たまひて 定めてし 瑞穂の国を 神ながら

太敷きまして」 やすみしし 我が大君の 天 の下 奏したまへば 万代に 然しもあらむ

とへに云ふ、「かくしもあらむと」 木綿花の 栄 ゆる時に 我が大君 皇子の御門をへに云ふ、

「さす竹の 皇子の御門を」 神宮に 装ひまつり て 使はしし 御門の人も 白たへの 麻

衣着て 埴安の 御門の原に あかねさす 日のことごと 鹿じもの い這ひ伏しつ

ぬばたまの 夕に至れば 大殿を 振り放け 見つつ 鶉なす い這ひもとほり 侍へど

侍ひ得ねば 春鳥の さまよひぬれば 嘆き も いまだ過ぎぬに 思ひも いまだ尽きね

ば 言さへく 百済の原ゆ 神葬り 葬りい ませて あさもよし 城上の宮を 常宮と

高くしたてて 神ながら 鎮まりましぬ」 然れども 我が大君の 万代と 思ほしめして

作らしし 香具山の宮 万代に 過ぎむと思へや 天のごと 振り放け見つつ 玉だすき かけて俣はむ 恐くありとも」 (小学館 日本古典文学全集)

(二) ②九〇五『古今集』 仮名序で紀貫之が『柿本人麻呂は歌聖と記す』

『梁塵秘抄』後白河法皇 勅撰集とは天皇の命による書物

一二〇五『新古今集』 後鳥羽上皇(承久の変で隠岐へ 編集) 西行 藤原定家

『連理秘抄』二条良基 その時 連歌の四天王 吉田兼好 頼阿 浄弁 慶雲

一三五六 『菟玖波集』准勅撰集 二条良基<sup>87</sup> 救済<sup>127</sup> 佐々木道誉<sup>81</sup>

足利尊氏<sup>88</sup>

一四八八 『水無瀬三吟百韻』後鳥羽上皇の離宮跡の水無瀬神宮に上皇二五〇回

忌奉納連歌

一四七一 東常縁が飯尾宗祇に古今伝授する

一四九五 『新撰菟玖波集』准勅撰集 後土御門天皇 大内政弘 宗祇

三条西実隆

③一五七五 『桂林抄』三条西実枝

一五八二 『連歌至宝抄』里村紹巴

一五八六 『詠歌大概抄』細川幽齋

一五八二(天正一〇年) 明智光秀の連歌 その後本能寺の変

一五八七 温泉津に残した細川幽齋の百韻

一五八七 その時の細川幽齋の紀行文『九州道の記』

一六〇〇 関ヶ原の戦いと細川幽齋

田辺城にこもる細川幽齋と古今伝授(三条西実枝から受ける) 後陽成天

皇の勅命 八条宮智仁親王への伝授 烏丸光広勅使

松尾芭蕉の俳諧連歌 わび さびの世界

まとめ

古代 『万葉集』—平安時代 『古今集』—鎌倉時代(頼朝 頼家 実朝)—南北

朝時代(後醍醐天皇 足利尊氏)—室町時代(足利氏 大内氏)—江戸時代—近

代公家文化(蹴鞠 能楽 連歌 茶道 香道)と武家文化

揆を一にする 連歌会 連歌座

補足

毛利元就の発句

④『五月雨はおもはぬ浦の住居かな』

④について紹巴は「所々ご在陣の当意即妙なるべし」と評す

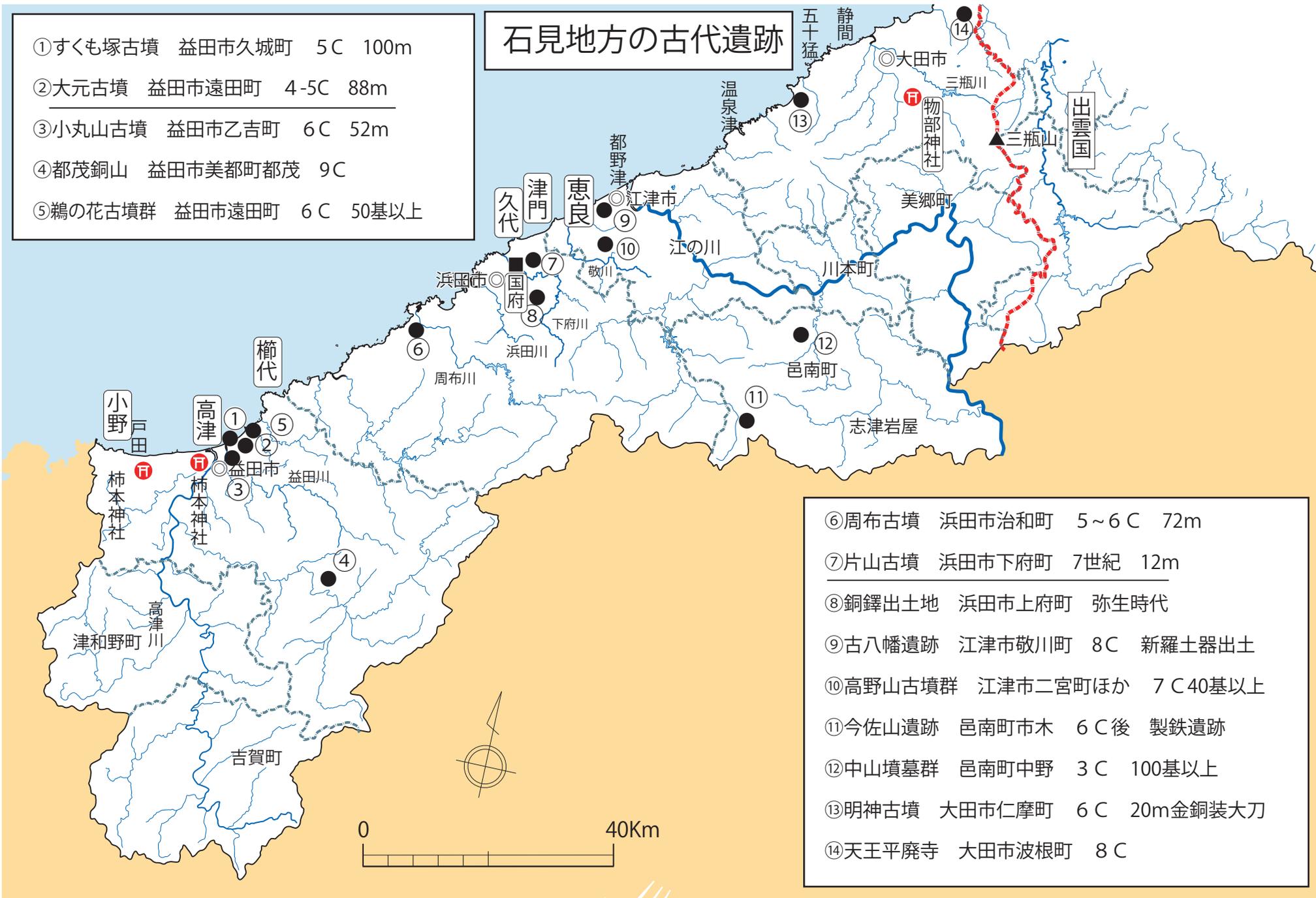
④『雲州に在陣せし比、嶋根といふ所にて 秋の月雪にやにほの浜千鳥』

④について、この発句から推定するに、尼子氏の根拠月山富田城攻囲中に洗合(松江市)の本營で詠んだものと考えられる。元就の住むところ、すなわち都であったという。



# 石見地方の古代遺跡

- ①すくも塚古墳 益田市久城町 5C 100m
- ②大元古墳 益田市遠田町 4-5C 88m
- ③小丸山古墳 益田市乙吉町 6C 52m
- ④都茂銅山 益田市美都町都茂 9C
- ⑤鶉の花古墳群 益田市遠田町 6C 50基以上



- ⑥周布古墳 浜田市治和町 5~6C 72m
- ⑦片山古墳 浜田市下府町 7世紀 12m
- ⑧銅鐸出土地 浜田市上府町 弥生時代
- ⑨古八幡遺跡 江津市敬川町 8C 新羅土器出土
- ⑩高野山古墳群 江津市二宮町ほか 7C 40基以上
- ⑪今佐山遺跡 邑南町市木 6C後 製鉄遺跡
- ⑫中山墳墓群 邑南町中野 3C 100基以上
- ⑬明神古墳 大田市仁摩町 6C 20m金銅装大刀
- ⑭天王平廃寺 大田市波根町 8C